

石川淳未発表原稿「華厳」「しぐれ歌仙」続稿・翻刻と解説

——世田谷文学館所蔵資料より——

小池智子・山口俊雄

〔要旨〕二〇一九年度に世田谷文学館へ石川淳関係資料五〇四件（原稿、自筆資料、石川淳宛書簡等）が寄贈された。本稿では、まず、資料整理を担当した世田谷文学館学芸員・小池智子が寄贈された資料の概要について解説し、続いて山口俊雄がその資料の中に含まれていた未発表原稿二点、小説「華厳」「しぐれ歌仙」の続稿について、翻刻ならびに解説を提示する。これらを通じて、石川淳関係資料の存在およびその意義を広く知ってもらうとともに、一部資料の翻刻・紹介を通じて所蔵品の資料的価値の一端に触れてもらいたい。〔キーワード〕石川淳・世田谷文学館・未発表原稿・日記・受信書簡（来簡）

一 世田谷文学館所蔵石川淳関係資料の概要について （小池智子）

石川淳（一八九九〜一九八七）は、一九三七年芥川賞受賞の「普賢」、一九四六年発表の「黄金伝説」、「焼跡のイエス」、一九五六年刊行の「紫苑物語」、一九八〇年刊行の「狂風記」、八四歳の一九八三年に刊行した

『六道遊行』など、昭和を代表する小説家の一人であるとともに、「夷齋」の号を冠した数々の名随筆でも知られる。

石川は東京の浅草に生まれ、一九四七年から四八年にかけて世田谷区北沢一丁目、一九四八年から四九年にかけて北沢二丁目に暮らした、世田谷区ゆかりの作家である。

当館では二〇一九年度に、石川淳のご長男、石川真樹氏から五〇四件に及ぶ原稿、自筆資料、石川淳宛書簡を寄贈いただいた。なお他にも、二〇一三年度に元筑摩書房編集者・石井立たつる氏のご遺族寄贈による『諸国崎人伝』（一九五七年刊）の原稿全編を所蔵している。

このたびの石川家寄贈資料の内訳は、原稿は七一件（『夷齋俚言』『夷齋清言』収録原稿、「華厳」連載原稿は一式で登録）、自筆資料一六件、受信書簡四一六件、その他一件（『坂口安吾全集』パンフレット）である。

【原稿】

自筆原稿類は、雑誌『表現』の休刊（一九四九年）により連載途中で未完となった「華厳」全回分と、『鷹』、『珊瑚』（いずれも一九五三年刊）、『鳴神』（一九五四年刊）、『落花』（一九五五年刊）にまとめられた短篇、中篇、さらに晩年の長篇「六道遊行」の一九八二年連載分の一部（十五〜二十）など。さらにこの中には、「華厳」の雑誌に掲載されていない続き一回分や、「しぐれ歌仙」（五五年）の続きとして書かれたと考えられる「しぐれ歌仙（第二回）」という二点の未発表原稿も含まれている。

また、俳優座のために書かれた初の戯曲「おまへの敵はおまへだ」（一九六一年）の原稿や、『夷齋俚言』（一九五二年刊）、『夷齋清言』（一九五四年刊）として刊行された随筆原稿（『夷齋俚言』収録の「安部公房著『壁』序」は、切抜に朱字書入れ校）、第六二回〜六五回（一九七〇〜七一年）の芥川賞選評原稿など、内容は多岐にわたる。

研究の観点から見た自筆原稿の価値は完成作品との校異にあると言えるが、しつかりした筆跡でよどみなく書かれた文字も強い印象を与える。さらに、多くの入稿原稿一枚目には、新仮名づかいお断り、新漢字お断り、または用字変更お断り、原稿は返却のことと、編集者宛ての要望がはっきりと書かれている。石川は、『夷齋俚言』に収録された「論争ばかり」の中で、「新カナ漢字制限、ともに必ずしも毛ぎらひすべからずだが、もしこの提唱が精神に於て怠惰であり、あたまに於てわるいといふやうな性質のものに属するとしたらば、どうも愚策だね。」と述べているが、権力や為政者による理に合わない決定に対する石川の反骨精神が自筆原稿からも窺われる。

【自筆資料】

原稿以外の自筆資料の中で特に注目されるのは一九五〇年元旦から五四年八月にかけての日記で、この中には小説、随筆の脱稿の記録、執筆の依頼や刊行計画だけでなく、作家や編集者たちの来訪、安部公房や福永武彦ら後輩作家、編集者、知人らと出向いた先でさらに文学者たちと一緒に酒を酌み交わす様や、美術展、観劇、映画へ赴いたこと、和書漢籍のほかサルトルやカミュら同時代のフランス作品原書の購入と読後感なども丁寧に記されている。未完のまま刊行されなかった「華厳」についても、続きの執筆や刊行の話が上がっていたことが一九五〇年の日記に書き残されていた。

一九五一年に芥川賞を受賞した安部公房「壁—S・カルマ氏の犯罪—」に関し、前年三月五日に草稿二〇六枚を預かり、掲載先を見つけるために尽力した様子や、一九五一年の九月六日の項には加藤周一の渡仏の際にフランスから「文学界」へ寄稿できるように文芸春秋社の池島信平に配慮を頼むなど、才能ある後輩作家を大事にする石川の姿勢のみならず、来信書簡と突き合わせることで他の作家の作品背景を知ることができる。

そのほか、『南画大體』（一九五九年）執筆のためと思われる、池大雅、与謝蕪村ら近世文人画（南画）の大家とその代表作、所蔵する寺院、博物館、美術商についてのメモ、七代目市川團十郎（俳名・白猿）に関するメモなど評論執筆の準備と推定できる資料も残されている。

【来信書簡】

石川淳あての書簡の発信者は、中野重治、小林秀雄、野間宏、吉田健一、川端康成ら同世代や年長の文学者に、安部公房、加藤周一、福永武

彦、丸谷才一、開高健、鳥尾敏雄、三島由紀夫、澁澤龍彦ら後輩の作家たちは勿論のこと、仏文の山内義雄や窪田啓作、中国文学者の吉川幸次郎、国文の野間光辰、野口武彦、歴史学の萩原延寿、森銚三ら研究者、評論家たちからの書簡も数多い。

これらの書簡は、著書献本の礼状や旅先からの便りから、後輩作家たちの執筆の悩みを打ち明けるもの、寄稿の依頼、作品の感想、執筆のための資料調査協力を申し出るものまでさまざまだが、石川に対する信頼、親しみ、敬意のこもった書簡が多く、それが手許に残されていた所以とも推測される。

書簡の中には、発信者の創作活動における興味深い文面も含まれているものもあり、石川淳研究だけではなく多方面で活用されることが期待される。

二 未発表原稿二点―「華嚴」「しぐれ歌仙」(山口俊雄)

「一」で言及があったように、世田谷文学館所蔵石川淳関係資料の中に中絶作「華嚴」「しぐれ歌仙」の未発表の続稿(所蔵番号一二九〇五二、一二九〇八四)が含まれていた。石川自身が発表を見合わせた文章であり、両作とも既発表部分も含めて石川生前の単行本には収録されなかったが、未完作・中絶作からも夷斎石川淳の文業を考える際のヒントや手がかりが見出せるはずである。幸い、著作権継承者・石川眞樹氏および所蔵機関である世田谷文学館からの許可が得られたため、原稿の翻刻および解説・関連資料を以下に示す。

両作品の原稿の一枚目の写真をモノクロで載せておく。原稿の現物では書き直しの跡等も歴然と確認できるが、推敲の過程は拾わず、最終的

な本文のみを翻刻することとする。翻刻文中の「」内の語は山口が補ったものである。

(1) 「華嚴」続稿

① 翻刻(四百字詰め原稿用紙十一枚)

華嚴 ツツキ 石川淳

十

——當分わたくしをひとりにしておいて下さいませ。おもへば、今までは自分といふものを他人まかせにしすぎて来たやうでございました。おそまきながら、せめて自分の身柄ぐらゐは自分の手でまかなつて行きたいと存じます。自分の時間。この掛替のないものを、わたくしは他人の時間の口座にあづけっぱなしにして、そこで計算がごまかされるかどうかも知らずに、つまり自分で自分をごまかしてゐるかどうかもさくらぬふりで、むざむざと日目を殺しつづけてまゐりました。もうたたくさん。見物の笑聲しかきこえないやうな白晝のまぶしい悲劇には、わたくしもう堪えられません。くらやみの中でも、ひとりで手さぐりにすすんで行くことにいたします。わたくしの行きどころをおさがし下さいますな。もしかわたくしを呼びもどさうとでもいふおつもりでしたら、かたく御無用にねがひます。それはまたあなたにとつても時間のおむだでございませう。さしあたり、わたくしはどうやら風波から安全なところのものがれ出てゐるといふことだけをお知らせ申上げておきます。 富子

下
 一 藩からなくしてヒトリにしておいて下
 さいませ。おち一は、今もでは自分と知り
 のを他人をおかせにせず来てちやうでござい
 ます。おち一は、おえまきながら、せめて自分の身柄
 ぐらゐは自分の手でまか存して行きたいと
 します。自分の時隙。この掛稽のなまの
 を、わたくしは他人の時隙の間にあづけつ
 ばなして、又こゝで計算がまかまかするが
 とうが知りません。つまり自分で自分をま
 かにあづかどうかにまそうぬかりで、おち
 ちがて目を驚しつげんおちがまか。し
 うたくさん。貝物の袋帯一がきこえなうやう
 なる自畫のまがしと悲劇には、わたくしはう堪
 えられません。くちやまの申で、ヒトリで
 年たぐりにすすんで行くことになつた。おち
 ちがし、わたくしの行きどころをおちがし下つた
 だ。ししかれなくして呼びよせたとてい

十

華嚴ツツア

川島

市葉一蔵に宛てたこのみじかいたよりは、宮重平馬の手をへて、友枝友次郎のもとにとどけられた。いや、とどけて来たのは書類の束である。市葉のいふところの出版事業について、その性質と企畫とを綿密に説明した書類は、じつはそれをつくりあげるのに平馬も片棒かついだもので、見込ありげなうたひ文句と計算とが必要以上に「ごたごた」とならべてあつた。といふのは、書類が「ごたごた」すればするほど、友次郎が克明に目を通すやうな人物ではないと、知れきつてゐたからである。まったく、友次郎はそれに目もくれなかつた。そして、富子の手紙はあたかもぜんぜん無関係の紙きれがうつかりまぎれこんだといふふうに書類のあひだにはさみこまれてゐたが、友次郎はその紙きれに氣がつかなかつたのか、もしくは氣がつかないふりをしたのか、いづれとも判じかねるやうすであつた。

書類は平馬の膝もとに突きかへされて、

「しらべておいてくれたまへ。」

たつた一言、友次郎はさういふと、ついそつぽを向いた。

しらべる。なにを。書類の内容のことならば、平馬は今さらしらべるまでもなかつた。しらべることがあるとすれば、富子の行方よりほかにい。おもへば、先夜のいきさつに依つて、富子の身柄は市葉が友次郎からあづかつたものになつてゐた。そのあづかりものが行方しれずでは、肝腎の書類のあつかひにもひびいて来るはずだらう。平馬は市葉側の一人として、富子をうしなつたことにつきいささか責任を分擔しなくてはならぬやうであつた。いや、さうでなくても、富子の居どころを嗅ぎつけたといふ強い探索癖がむらむらとした。

不思議なことに、この富子の家出について、市葉は眉ひとつうごかさないうやうに見えた。すくなくとも、すでにおさへつけたらしい心中のみ

だれを平馬の目にのぞかせるやうなけはひは顔にもことばにも出さなかつた。立ち入つてきかうとするものに對しては、無言の扉をとぎしたままであつた。手紙はそもそも平馬の手に托されたときから、書類の中にまぎれこんでゐた。同類の市葉の肚のうちさへ讀みとりかねる平馬なのだから、まして日ごろあたまのあがらない友次郎の無表情を何とも判ずるすべは無かつた。そのとき、友次郎のゐた松若のざしきに百合香のすがたが見えなかつたので、もしやそのための不機嫌でもあるのかと、あやふやに目測をつけただけであつた。實際に、百合香は二三日病氣で休んでゐると、これは女中からきかされた。平馬は突きかへされた書類と手紙とをかかへて、あまり雲行のおもしろくなささうな席をいそいですべり出た。

丸の内の事務所にもどつて来て、平馬はもう一度手紙をあらためて見た。文面はどうでもよい。探索にとつて重要なのは消印のはうであつた。手紙は中央郵便局から出されたものと知れた。そこならば、この事務所とは目と鼻のあひだである。まさか、富子は中央郵便局を出た足でつい東京驛から遠くに高飛したわけでもあるまい。といつて、まだ丸の内界隈をうろついてゐるはずもないだらう。おそらく、たづねびとはここからさう遠くないところに、それも下町ではなくて、山の手のどこかにひそんでゐるのではないか。この勘は大雑把ながらあつてはゐた。

ところで、その行方をさがすにはどうするか。警察はいふまでもなく禁物である。そして、うごかなくてはならぬはずの市葉はうごきさうもない。自分ひとり、雲をつかむやうなさがしもののために、毎日てくてく市中をあるきまはらなくてはならないのだらうか。しかし、平馬はふだん相棒の大串守夫に手を借りようといふ氣はしなかつた。この男、かういふこまかい仕事には邪魔にこそなれ、とんと役にたつやつではな

かつた。よし、自分ひとりでやる。何のための「宮重調査室」か。首尾よく獲物の巢を突きとめたときには、友次郎に對しても、市葉に對しても、手柄はひとりじめといふ打算もそこにはたらない。いや、打算といへば、まづこの件をさばいたうへでなくては、例の書類に筋金のはひらないといふ深刻な事情が第一にあつた。

「どうしても見つけてやる。」

平馬は軽くテイルをたたいて、おもはずつぶやきを洩らしたが、そばにゐた少年がそれをききつけて、げげんな顔をしてふり向いた。そのとき、平馬はふつと三郎にかういひかけた。

「おい。おまへ、市葉を知つてゐたな。」

「いつだつたか、ここに来たことのあつたひとでせう。」

市葉のすがたをここで見かけたのは一度だけであつたが、その名は三郎の耳にもをりをりききなれてゐた。

「うむ。市葉の奥さんは。」

「奥さん。あのとき市葉氏といつしよに来て、外で待つてゐた女のひと、あれぢやないですか。」

少年としては目のはやいことにおどろいてもよいところであつた。しかし、平馬はさしあたりそのほうには氣がまはらないらしく、

「さうだ。おぼえてゐるか。」

「顔ですか。窓からのぞいただけだつたけれど、きれいなひとのやうでしたね。逢へば判るでせう。」

「あの女のことだが……」

「どうかしたんですか。」

「餘計なことをきくな。もしおまへがどこかであの女を見かけることがあつたら、そつとあとをつけて、行つたさきをおれに報告しろ。もち

ろん祕密だ。相手にさとられないやうにな。この界限をはじめ、銀座のほうにでも出かけたときには、注意してゐる。今はそれだけだ。追つて、なにか指令を發するかも知れない。場合に依つては、特別賞與をつけましょう。このことは絶対にだれにもしやべるな。」

三郎は返事をする代りに、まづさういふ平馬の態度を「注意」するところからはじめた。看板だけにしても調査室の、すなはち私立探偵事務所のはずなのに、いささかでも探偵らしい用件をいひつけられたことは今までに無かつた。これはなにかある。「特別賞與」のほうはあてにならないまでも、この祕密は金になりさうなほひがした。いける。ヨタモノの勘であつた。この祕密を盗まずに見おくるやうでは、せつかくこの事務所につとめてゐるかひがない。大安公司の品物をこそそそち出すよりはましだらう。どかんと一つ目にも見せてくれて、さつさとあとで砂で、ここを飛び出せばよい。平馬の鼻をあかしてやるといふことにも、じつはひそかなよろこびの豫感があつた。しかし、事件の真相をつかむまでは、しばらくがまんしなくてはならない。三郎は従順をよそほふことにはすでに慣れてゐた。そして、好都合にも、その見かけの従順にたれよりもだまされてゐたのは、決してひとにはだまされないと自負してゐる平馬であつた。

三郎は熱にうかされたやうな平馬の顔つきに事件のかけを目測しようとしてとめた。向うから口を割つて来るのを無言で待つといふ姿勢であつた。しかし、女の名は何といふのか。名まへぐらゐるはきいておいてもよからう。ついその問を口に出さうとしたとき、扉をたたく音がした。

はひつて来たのは金である。三郎はちらと目を見かしたきり、例に依つて素知らぬ顔をした。金はつかつかと平馬のそばに寄つて、無遠慮に、

「先生。カネを出してくれ。」

「なんだ。」

「あいつの首を絞めてやるんだ。」

「あいつとは。」

「靈南坂のやつだ。」

それが福住のこととさとして、三郎もひそかに聞耳をたてた。平馬は軽くそぶいて、

「ふむ。あいつがどうかしたのか。」

自分がカネを出す側になると、ぐつとそり身になりがちなのが、をかしいまでに態度にあらはれた。そして、自分に係りのふかいことにはわざとさりげないやうすを示すといふ小細工も、どうやら身についたものになつてゐた。もつとも、こいつ、さしあたり富子の搜索のはうに氣をうばはれてゐて、福住の件はちよつと心理的におあづけといふ事情もあるやうにうかがはれた。

しかし、金はいえ、この國籍不明の男は、あたかもねらふ敵がそこにあるかのやうに、血ばしつた目を据ゑて平馬に詰めよつて来た。復讐の一念に燃えたといふ面色である。もし福住にまで手のとどかないときは、それこそ獲物は平馬で間にあはせかねない氣合であつた。いや、平馬でなくても、日本人ならばたれでもよいのだらう。すなはち、この男の復讐の相手は日本人全體であり、福住はたまたま撰ばれた一人に相當するもののやうであつた。

② 「華嚴」続稿について

「華嚴」は角川書店発行の文芸雑誌『表現』^②一九四九年新年号（第二卷第一号）から七月号（第二卷第六号）までの毎号に計六回連載されたあと、八月号では休載——同号最終頁（二〇〇頁）末尾に《都合により、今月号、石川淳氏の「華嚴」休載させていただきます。》との記述あり——、この号で雑誌が休刊（廃刊）となり、「華嚴」続稿はどこにも発表されなかった。そして、既発表部分も含め、石川生前の刊本に収められることはなかった。

これまで中絶の経緯ははっきりせず、雑誌の廃刊もあつて続稿を書く意欲を阻喪したのだろうかと推測するのがせいぜいだったが、世田谷文学館所蔵資料の中に含まれていた一九五〇年一月から五四年八月に至る日記帖（以下『日記』と呼ぶ。市販の大学ノート計四冊。一九五〇・五一年分は同一冊で、あとは年ごとに一冊。所蔵番号二二九二二三～二六）の中に「華嚴」関連の記載が見付かり、石川に続稿を書く意思があつたことが確認された。

関係箇所を『日記』本文から引いておこう。

○「一九五〇年」一月十九日（木）晴。新潮社酒井健次郎来。華嚴書下し出版につき交渉ありたれど話まとまらず、しばらく様子を見ること、す、別に新潮文庫にて短篇集を編むべきことを約す、^③「略」

○三月八日（水）晴。河辺健一來、人間に華嚴の続稿を掲載したしといふ。おそらく書くことになるべし。「略」

○四月三日（月）晴。新潮社におもむきて華嚴書きおろしの件につき

酒井健二郎と打合せをす、「略」

○四月四日(火)晴。新潮社と華嚴書下しに関し契約書を取交す、書下し費用のうち三萬圓受領、雑誌人間に華嚴寄稿の件を取りやめにするをつたふ。「略」

○四月五日(水)くもりのち雨。華嚴の一部分を新潮に掲載すべき場合について一二の注意を書き新潮社出版部宛に郵送す

○四月八日(土)晴。新潮社新田敵来信、華嚴の一部を新潮に掲載する場合掲載料を支拂ふべき旨を通知し来る、「略」

○五月十一日(木)晴。新潮社にて二萬圓受領。華嚴書下し費用の一部也。「略」

○五月三十一日(水)晴のち小雨。新潮社にて華嚴書下し費用を受領す「略」

○六月十八日(日)霖雨すこしく晴る華嚴才九章を書く

これらの記述から、石川に続稿を書く意思があり、発表方法として、まず、書き下ろしの形で刊行を考えて新潮社に持ちかけ、併せて文芸雑誌『人間』への連載の約束もいったん取り付けたようだが、新潮社からの刊行に落ち着いたことが分かる。書き下ろしの費用も受け取り、執筆にも着手しようだが、結局、発表に至ることはなかった。

なお、右『日記』の記述には『才九章を書く』とあるが、この度の世田谷文学館所蔵資料の中にあつたのは第十章(「十」)の原稿である。現在のところ第九章の所在は不明だが、第十章の原稿が出て来た以上、第九章は一通り完成していたはずである。⁵⁾

「華嚴」の既発表部分、「八」までの内容を簡単にまとめると次のようになるだろう。

神田に平和社という出版社のオフィスを持つ市葉一蔵は、戦争中は海軍のツテで紙を入手し、興亜社という看板のもと時局迎合的な出版物で稼いでいた。追放指定はぎりぎり免れたが、『マクシム』という文芸雑誌を発行する義兄たち(共産党)に乗っ取られそうな状況にある。『マクシム』同人たちは平和社を自分たちの会社にすべく資金援助(月百万円)の約束を同人の一人・福住久夫の旧友であり静岡県の製茶王の二代目である友枝友次郎から取り付けるが、対立する立場の市葉のほうも同額の資金援助を獲得する。

このような左右の対立構図に、一ノ瀬富子——学生時代には福住の恋人、今は市葉の愛人——に友枝が感心を示すという形で色模様も絡もうとしている。

世田谷文学館所蔵の「十」は、三人の男からの取り合いという立場になった富子(富子)が姿をくまますことを告げた市葉宛の手紙から始まり、先代の書生だったため友枝の貿易会社・大安会社に飼い殺し同然で雇われているゴロツキ的人物・宮重平馬が会社のアルバイトの若者にこっそり自分の仕事を頼む場面、そして平馬が手下に使っているヨタモノの金が、福住を懲らしめるためと言って平馬にお金を求める場面と続く。

男性たちからモノのように取り合いにされることに抗して富子が《自分の身柄ぐらゐは自分の手でまかなつて行きたい》と自立を宣言したり、《国籍不明の男》⁶⁾に在日コリアンの金について《この男の復讐の相手は日本人全體であり》と書かれたりしているところから、マイノリティの抵抗という局面が組み込まれている様子も窺われる。作品タイトル「華嚴」は、大乘仏典の中でも特に、すべてが関係性の中で生じることに焦点を当てた「華嚴経」から取ったものだろうが、マイノリティも含めた

多様な人物が絡み合うこの作品の構想の射程はよほど大きなものだったのだろうと推測される。

一九四九年、発表時期の同時代の東京を舞台に、戦後日本の進路を左右対立の中に望見しようとしたスケールの大きな作品と言って良さそうだが、その後の現実世界の変転の激しさ——中華人民共和国成立（一九四九年一〇月）後の「逆コース」の深刻化、コミンフォルム批判による日本共産党の分裂・非公然活動の開始、共産党中央委員の公職追放、『アカハタ』の発行停止、朝鮮戦争の勃発（一九五〇年六月）……により、作品を支える構図が立ちゆかなくなったということが中絶の大きな理由となったのではなからうか。

(2) 「しぐれ歌仙」続稿

① 翻刻（四百字詰め原稿用紙十七枚）

しぐれ歌仙（第二回）

石川淳

二

辰子と亥吉との関係は、子之助はとうに知つてゐた。といふのは、亥吉みづからそれを子之助に告げたからである。さうでなくても、子之助はかねてうすうすは感じてゐた。したがつて、亥吉の告白は意外とおもはなかつた。ただ意外ではなかつたといふことをもつて、事件のめんどろな性質をはぐらかすことはできない。しかし、実際には、子之助はあたかもみづからそれをはぐらかさうとするかのやうに、つとめて冷

静に、すなはちまともに受けては立たないといふかまへで、亥吉に對した。はなしはうけたまはつておく。さういふ態度であつた。面とむかつての告白にまで踏みきつた亥吉としては、この態度には拍子抜けの氣味ではあつたものの、じつはどこかでほつと息をついたやうなところが無いでもなかつた。子之助がうすうす感じてゐるらしいといふことは、亥吉にも察しがついてゐたので、先方から切り出されるよりもいつそちらからと、これはみづから設定してかかつたどんづまりであつた。さうなるはずが、どんづまりにならない。一寸のびる。それでも、亥吉はそのときその一寸を追ひつめようといふ氣合で、最後にはつきり一言かういつた。

「あのひとは、ぼくがいただく。」

すると、子之助も一言かう答へた。

「その結論はすぐには出ない。」

その場には、辰子もゐた。そこは子之助の家で、亥吉はいつものやうな雑談のなかばに、ずばりとはなしを告白に切替へたものであつた。辰子をはじめから口をきかなかつた。最後に、男ふたりが目で見えをもとめても、辰子はやっぱりなにもいはない。さつきからそばで聞いてゐたはずのやりとりを、こころして耳にとめてゐたのかどうかさへ判らなかつた。もつとも、男たちのほうにしても、辰子がこの場合なにかの意見をこぼにまとめて出さうとは期待してゐないやうであつた。灯にそむいた女の横顔に、讀みとりがたい運命の影がゆれた。結論が出ないままに夜がふけて、亥吉はかへつた。

あとで、子之助は辰子にむかつて「あれは行きがかりだ。」といつた。行きがかりとは、いささか酒氣をおびてもゐた亥吉がみづからブレーキをかけるすべをうしなつて、告白にすべりこみ、最後の一言に乗りあげ

たのだといふ意味であつた。その子之助のことは、亥吉のちに辰子からつたへ聞いて、不服におもつた。なるほど當夜は酒のけが無かつたとはいへないが、最後の一言は酔つたいきほひで發したものでなかつた。げんに、その二三日まへから、亥吉は「いふぞ」とくりかへして辰子に豫告してゐたくらゐであつた。それを、行きがかりとはなにか。亥吉はかういつた。「あれは届を出しておいたやうなものだ。」亥吉の意中では、してしまつた告白はすでに通告にひとしかつた。ただ相手の子之助のはうが、「結論はすぐには出ない」といふ挨拶をもつて、その届をひとまづ受理したことになるのかどうか判然としなかつた。しかし、すくなくとも結論が出るまでのあひだ、亥吉は届は突つかへされてゐないと考へる権利をみづから許した。すなはち、おほつびらに、子之助の目のまへでさへ、辰子をほとんどおのれの婚約者のやうにあつかふ仕打がしぜん板について来た。そして、おほつびらであるだけ逆効果的に、なにも知らぬ他人の目には、その仕打がごく親密なものどうしの、ほんのプレイでしかないやうに見られもした。いや、たれよりも、當人どうしが、亥吉の側からも、子之助の側からも、今までのとなりづきあひの平和的形態をすすんでぶちこはさうとするけはひは微塵も見えなかつた。亥吉は辰子に「ぼくはきみがすぎだから、したがつて子之助君もきらひではない。」といつたことがあつた。辰子は何となく聞きながしたやうであつたが、これをことほどうり素直に受けとるものは子之助のほかにあるないだらう。また子之助がもし亥吉についてなにかいつたとすれば、やつぱりこれと似たやうなことを裏がへしにいふほかなかつたにちがひない。

この不思議な關係に身を置いて、亥吉は子之助の結論の出し方を見まもりながら、別にひそかに逃げるといふことを考へはじめてゐた。この

關係からか。いや、その他の一切から。すなはち現在の自分といふものから。その逃げるといふ考へは亥吉のうちに次第に固定して来た。ただそれは亥吉の生活にとつて結論ではなくて出發になるはずのものであつた。ところで、それが結論にも出發にも、さしあたりどうにもならぬ具體的な羽目につかつたのは、この計算はづれの差押の朝であつた。

「くだらねえ。」

くだらないとは、何のことか。ひとりでさうつぶやいて、亥吉はこの朝家を出て行つたが、晩になつてもかへつて来なかつた。

子之助は縁側の雨戸をしめながら、庭ごしに、となりの家の窓の、くろぐろと閉ざされたままなのを見て、

「となりもなかなかたいへんだな。」

それが皮肉の調子ではなく、おのづから聲に出たといふふうであつたが、それでもこの「たいへん」には二重の意味があるやうにきこえた。

辰子が座敷のほうで、

「さうね。」

これは至極そつけなかつた。

夜ふけて、その雨戸の外に、ひそかにちかづく足音がして、

「おやすみ。」

亥吉の聲であつた。たがひに夜ふかしの癖の、灯がもれるのに、まだ寝てゐないと知つたのだらう。子之助が目くぼせすると、辰子が立つて行つて、雨戸を一枚ほそめにあげた。とたんに、夜風がつめたくながれこんで来た。

「どうぞ。」

「いいいいい。」

「こつちが寒いわよ。」

あがつて来ると、ぶんと酒のほひがした。子之助が炬燵から聲をかけて、

「あひかはらずの景氣だな。」

その炬燵に遠慮なくはひつて、

「御愁傷さまといはれたみたいだ。」

さういつても、けさの一件でしよげたとも見えぬたつしやな顔つきで、それが附景氣とも本性とも判じかねた。出された茶を一口のむと、

「わすれないうちに……」

ポケットから手帖を出して、ほそい鉛筆で書きつけたのに、

「なんだ。」

「いや、例のやつだよ。かへりみちに、でつちあげたんだ。」

手帖の一ひらを裂いて、借金でもかへすやうに、それを子之助にわたした。そこにかう書いてあつた。

春暑し俄分限の若やぎて

一目見て、子之助はおもしろくなかつた。句意はさせることもない。

前句の床の間のけしきに、どうも逆附さかつけの氣味ではあるが、これでもまあ

あきこえる。しかし、この第五は月が出るべきところであつた。それを知らぬ亥吉でもない。ここで出さないとすると、表六句は月なしではす

まされぬ定めなのだから、つぎの才六に月を押しつけて来たことになる。

それもまあよい。ただこの句ぶりでは、春の月を附けるにしても、つぎに月が出しにくくなるではないか。かへりみちに考へて来たといふが、

なにを考へたのか。うたぐつてみれば……いや、うたぐりをおこさせる

元はなにか。わざとこまらせてやらうとするやうな相手の仕打は腑におちかねるものであつた。すくなくとも、意地がわるい。しかも、その當

人がしらじらしく、酔にはつてた顔に他意のなささうな笑さへうかべて

ゐる。それこそつとも悪質なたくらみのしるしではないか。ひとをこまらせる、くるしめる、ワナにかける、穴に追ひこむ。そして、なに食

はぬ顔と見えた。さういつても、附けにくい月を押しつけてよこすには、敵の側にも無理くめんはあるのだらう。差押をくつた身の上で、「俄分限」

も笑はせる。どこからひねり出した著想か。おもへば、かつて「俄分限」

と呼ばれたのは、子之助の亡父の身の上であつた。もしかすると、「若

やぎて」とは、だいぶ年のちがふ妻をもつた子之助の身にあてつけたつ

りかも知れない。いや、うたぐりはじめてはきりが無い。附合つけあひのくふうから離れて行くやうなところに、相手の肚の底をあれこれとさぐるの

は、やつぱり邪推ではある。ただ子之助に於て、その邪推はおのづから

嫉妬に直結した。もしこちらの肚の底に嫉妬のしこりが無かつたとすれば、かうまでうたぐりぶかくなるものだらうか。まして、これは風雅の

交渉である。もともと嫉妬が顔を出す場ではない。ふだんから、子之助

は亥吉にむかつて、ことばにもそぶりにも、ついぞ嫉妬らしい影さへ洩

らさなかつたが、それはしひておのれを押し殺してゐるといふよりも、

どうもさういふ執念をもつてゐないやうな生れつきかとも見えた。おれ

といふ人間はどうすればかうヤキモチがやけないのか。げんに、當人がさうおもひもした。すなはち、亥吉は子之助にとつてにくむべき敵であ

るよりもやつぱり友だちであつた。しかるに、友だち以上の、いはば純

粋な友情の唱和であるべき俳諧のあそびにとりかかると、子之助は突然

亥吉に於て絶對に嫉妬しなくてはならぬ女房ぬすびとをそこにみとめた。こいつだ。こいつこそ許しやうのない敵だ。目がひらけたといふほどの實感であつた。そして、その實感が肚にこたへたところに、おのれの嫉妬を突きとめた。しかも、それを突きとめなくてはゐられぬやうな

ぐあひに、敵のはうから仕向けて来るではないか。出しにくい月がます

ますいらだたしかつた。

だまりこんだ子之助の顔色を氣にとめるやうすもなく、亥吉はのんきさうに、

「せつかくりはじめたものだから、歌仙にもちこみたいね。」

なにを。子之助は露骨にむつとした。しかし、奇妙なことに、それはあたかも敵の申出をよるこんで承諾したかのやうな表情になつてあらはれた。何といはう。子之助はさういふ顔つきに生れついてゐた。

そのとき、遠くに門をたたく音がきこえた。となりの、亥吉の家の門のやうであつた。やがて、みだれた足音が裏手にまはつて、二三人の聲がはつきり亥吉の姓を呼んだ。

「乙部君、乙部君。」

亥吉は腰を浮かせて、

「だれか来たな。ぢや、またあした。」

つい立つて行かうとするのに、

「あ、ちよつと。」

子之助は聲をかけておいて、さつきわたされた紙きれの裏に、これも鉛筆で、手ばやくかう書きつけた。

人聲おぼろ月にあざける

亥吉はその紙きれを受けとつて、ちらと見ただけで、なにもいはずに、庭さきから出て行つた。

三

「乙部君、きみはいつたいどうする料簡だ。」

男ふたり女ひとりの客の、いきほひこんで詰めよつたのに對して、

「どうもかうもないさ。どのみち、われわれは出たとこ勝負ではじめ

た仕事だ。」

うそぶいた亥吉の態度はふてぶてしく見えた。ほんたうに度胸を据ゑたとも、やけくそのふてくされとも、見當がつかかぬたが、それはなほさら相手の激昂をそそり立てたやうであつた。

「だから、これは絶対に負けられない場合ぢやないか。きみのやくざな鞆がだらしなく差押をくつたおかげで、わるくすると、われわれ全體の破滅にもなりかねない。すずしい顔をしてゐられてはこまるね。」

その赤革の鞆は亥吉の背後の、ベッドの下に、まだけさのままに置かれてゐた。深夜の闇のかたまりがそこに生きもののやうにわだかまつてゐて、電燈の光をくらくするほどのけはひであつた。たしかに、もしその鞆が他人の手にわたつて、くらやみから白日のもとに中味がさらけ出される仕儀になつたとすれば、このものどもの身にとつて破滅にちがひない。といふのは、鞆の底に秘められたピストルとアヘンこそ、この一味がかねていとなんである密貿易の主要な品目であつたからである。腕時計とか寶石とかのやうな萬人むきの無難なやつではなくて、そのものの性質に於て危険な右の二つの品を秘密にさばくといふこれまた危険な操作に、亥吉はたまたまたあたへられた機會から手を巻きこまれたのではあつたが、いつかそのあらゆる危険の中にすすんで身ぐるみ投げこむといふことが氣に入つて来たやうに見えた。危険といへば、なによりも、この仕事の仲間である人間どものほうが油断のならぬものであつた。晝のあひだ、亥吉が當座の金策にあるいた筋から、はやくもけさの突發事件は仲間知れてゐた。今ここに押しかけて来た三人はのつけから責任を問はうといふ氣合をかくさうとはしなかつた。そして、亥吉のはうでも、今はだらしなくひるんではゐられない場合であつた。

「すずしいどころか、寒すぎるよ。だが、諸君にまでカゼの卷ぞへは

くはせないつもりだ。」

亥吉はほんたうに咳をしてみせた。ついさつき、かへりの夜道にカゼをひきこんだやうであつた。

「われわれは鞆のカゼのことをいつてゐるんだ。」

「そのことだよ。鞆は口があくようにすればいいだらう。」

「ふむ、右から左に税金がはらへるとでもいふのか。だが、その無理くめんのとばつちりを、こつちのあたまに掛けてもらひたくないな。」

「まさか、そこまで落ちぶれもしないだらう。」

「その大きな口の下から、まあつたといふなよ。もしどうしてもいいくないといふことになつたときは……」

「どうもかうもないさ。腹を切るだけのことだ。」

さういひはなつたことは、相手はもうがまんしきれないといふ調子で、あらい聲を一きは張りあげた。

「おい、いい加減にしろ。きみの腹なんぞを切つて見せたつて、われわれには餘計に迷惑がかかるばかりだ。」

うす笑をふくんだ亥吉の聲がそれをさへぎつた。

「ぼくの腹。常談ぢやない。だれが腹を切るといつた。」

「なに。」

「切るといつたのは、鞆の腹のことだ。」

亥吉はテーブルの上に拳をあてて、ぐいと引いて見せた。ちようどその下のひきだしの中には、ジャックナイフが入れてあつた。客はとばつとしたが、すぐに、

「それで……」

「例の品物をとり出して、きみたちにあづける。それでいいだらう。」

「いや、それできみはどうなるかといふんだ。」

「どうなるか。その土壇場になつたときはなしだよ。だが、土壇場の一あしてまへで、人間、無い智慧をしほつてばたばたして見せるのがまあ生活といふものだらう。ぼくは今そのばたばたのさいちゆうなんだ。」

② 「しぐれ歌仙」続稿について

「しぐれ歌仙」は『群像』（一九五五・一）に発表。本文末尾に《**第一回**》とあつたが続稿は発表されず。小説の物語的な展開の中に連句（歌仙）を織り込もうとしたユニークな試みであつたが、完成（完結）を見なかつた。

「しぐれ歌仙」の既発表部分「一」および未発表原稿の部分「二」から、ざつと次のような話だと分かる。

表向きは紙のブローカーで通しているが実はピストルやアヘンを扱う密貿易に関わっている乙部亥吉、その隣人夫婦、建築関係の会社に勤める子之助と辰子が主要登場人物で、亥吉が辰子に駆け落ちを持ちかけているよう、三角関係が設定されている。亥吉と子之助とは、隣人であること、辰子を取り合っていること以外にもう一つ、《俳諧の癖》《附合つけあひといふあそび》でも繋がっており、作中で附合が始まり、「一」で第四句まで、「二」で、第五、第六（月の座）まで進む。

小説に連句の附合を組み込むというのは大変ユニークな試みだと思われるが、相手の出した句を反芻しつづつ込められた真意を《邪推よこしま》したりするなど、附合を通じた心理戦が展開されるところが妙味で、三角関係も現実の生活においてよりも附合の言葉のやり取りのほうで戦われているという印象である。句作に生活が引きずられ、言葉の操作が主、生活

が従と、主従逆転する機微が踏まえられているとも言えようか。

作品冒頭で、現在の自分というものから逃げ出す支度をしていたと書かれていた亥吉であったが、税金滞納のための税務署職員による差押えや、仕事仲間からの突き上げを喰らうところまででしか原稿としては残っておらず、逃げ出すところまでは行かない。

附合のほうも、このたび翻刻した作中「二」で亥吉に《せつかくやりはじめたものだから、歌仙にもちこみたいね》と言わせているけれども、「二」で第六句まで進んだあと、「三」には一句も登場しない。

なかなか次の句が出せないと「三」を書きながら痛感し、それ以上続けることを諦めたのだろうか。ユニークな試みであるだけに残念である。

石川には、「しぐれ歌仙」に先立って、小説ではないが、句作の経緯や句意の説明とともに独吟を提示するという形を取った「首尾」(『群像』一九五二・三三)、「歌仙」(『群像』一九五二・二六、七)という試みが提出されている。『日記』から関連する記述を拾っておこう。

まず、「首尾」に関わる記述。

- 「一九五二年」一月二日(水)晴、終日家居、たはむれに三ッ物俳諧をこゝろむ 發句 羽の音軒に冴えたる寒さかな ワキ袖ひるがへす色のとりく 才三句 春さきの物見の支度せはしくて
- 一月十六日(水)晴。夜来首尾十八枚を草す、群像三月号に寄せんがため也、首尾十二句左の如し、但はじめの三句はさきにつくりたる三ッ物をもちゐたり「略」

「首尾」本文に《毎年正月には狂歌を詠むといふ、これはいくさ以来の悪癖をもつてゐる。ところでこの元日には狂歌を詠まなかつた。狂歌

のことをかんがへながら、ふつと、三ッ物をつくつてみやうとおもつた》と元日のこととして書かれているが、実際には二日のことだったようだ。同じく元日のこととして「首尾」に《三ッ物はすでにできあがつてゐる。しかし、それはわたしが恣意につくつたものである。かたはらに唱和する連衆は無いのだから、わたしはまたこれを恣意に引きのばすことができる。さういつても、歌仙だの百韻だのは、当座の独吟にはちと長すぎる。さうさう首尾といふものがあつた。表六句、裏六句、すべて十二句で、これはみじかい。まへに三句できてゐるのだから、あと九句継ぎたせばよい。これにしよう。とたんに、わたしは三ッ物を引きのばして、首尾に搗きかへようといふ途方もないおろかな料簡をおこした》(七一、七二頁)とあるが、おそらく実際には『群像』への寄稿の話が固まってから三ッ物を首尾に膨らませる作業をおこなったのであろう。

次に、「歌仙」に関わる記述。

- 「一九五二年」三月十七日(月)晴。角川書店におもむきて近江屋にて小酌 石田波郷に逢ふ、句あり
- 春浅きストーフ黒し明治軒 近江やに
売れて困る文庫本水温むなり 角川に
雛白酒の色に出でたり矢大臣 桂郎(9)に
くれなるの花には季無し枕もと 波郷子に
- 四月九日(水)晴。「略」甚だ酔ふ 酣中歌仙表六句をえたり
- 四月十八日(金)晴。夜来「歌仙」の稟を書きつぎて暁に成る、二十九枚、但上
- くれなるの花には季無し枕もと

「略」

春追ふ旅のわらんじを編む

つづく

右群像川島勝の来れるに與ふ、〔略〕

○五月十七日(日)晴。〔略〕今日さきごろより書きつゞけたる歌仙
続藁三十枚を脱藁す 右後半の十八句左のごとし

飛行機の影より霞みわたりけり

ほのかに低し先哲の墓

〔略〕

先に三ツ物を首尾に膨らませて句の成立過程なども織り込みながら
エッセイにまとめるという作業を試みた石川が今度は歌仙独吟に挑戦し
たわけだが、三月十七日の記述にある通り、酒席の同席者に句を贈った
こと、その同席者の中に俳人・石田波郷が含まれていたことが、その挑
戦の発端となったことが分かる。

このような試み・挑戦の延長線上に歌仙を織り込んだ小説を書こうと
いうアイディアが膨らんでいったのだろうが、物語の進行の中に句を当
てはめてゆくことはなかなか難しかったようだ。

注

- (1) 初出『文学界』一九五一・二〇、『石川淳全集 第十三卷』筑摩書房、
一九九〇、一八六頁
- (2) 石川は『表現』創刊号(一九四八・二)にも「変化雑載」を寄稿している。
- (3) 新潮文庫『処女懐胎』一九五〇年六月三〇日発行
- (4) もともと鎌倉文庫から発行されていたが、鎌倉文庫廃業のため一九五〇年一月

号(第五卷第一号)より日黒書店発行となる。一九五一年八月号(第六卷第八号)
で終刊。

- (5) 原稿の通し番号を確認すると、既発表部分(第八章まで)の最後の一枚が
一九一(原本ではアラビア数字横書き)、第十章の最初の一枚が写真(図版)
に見られる通り二二二なので、第九章は四〇〇字詰め原稿用紙で三十枚の分量
だったことが分かる。

(6) 『石川淳全集 第五卷』筑摩書房、一九八九、一一二頁

(7) 同、一一三頁

(8) 『石川淳全集 第十四卷』筑摩書房、一九九〇、六八頁

(9) 波郷に師事した俳人・石川桂郎だろう。

小池智子(世田谷文学館学芸員)
山口俊雄(本学教授)